

審査講評

地域資源を見直し、活かす経営管理技術を評価
－個性あるトータルマネジメントに注目－

審査委員長 横溝 功

今年度は17道府県の地方審査委員会より、酪農5事例、肉用牛繁殖1事例、肉用牛一貫2事例、養豚7事例、採卵鶏3事例の計18事例の推薦があった。個性ある優秀な経営が多く、審査委員会では例年と変わらず審査に苦慮し、一部経営について評価が分かれ、審議が紛糾したことを報告する。

これら推薦事例について、第1回審査委員会で書類審査を行い、最優秀賞、優秀賞候補として12事例を選考した。そして、書類内容で把握できなかった項目、審査上で必要な項目について現地確認を行った。第2回、第3回の審査委員会、追加の現地確認、および第4回の審査委員会を経て、先ほどの発表内容がこれまでの審査内容と相違ないことを確認し、最終的に最優秀賞4事例、優秀賞8事例を決定した。

審査基準は例年と大きく異なることはないが、異常な円高やデフレが進行する中、多くの畜産経営は、畜産物価格の下落によって、売上高を減少させている。このような状況下で、より地域資源を見直し、地域資源をより活用し、売上高の維持とコストの低減に努力している経営管理技術に重点をおいた。なお、今年も昨年同様に畜種別の垣根を取り除き、生産性、収益性等の経営実績、それを支える経営管理技術、特色ある取り組みや活動等を、評価の中心に据えて、審査を行ったことを強調する。

それでは、最優秀賞4点を発表する。

まず、酪農経営で岐阜県羽島市桑原町の「データを活用した経営改善 高次元の経営をめざす！！－経営改善から生まれた「ゆとり」を地域資源に活かす－」というテーマで発表された大井(おおい)幸男(ゆきお)さん。

つぎに、肉用牛(一貫)経営で北海道釧路市の「未利用資源の活用と「土－草－牛」が調和して高い飼料自給率を実現した、環境にやさしい牛肉生産の取り組み」というテーマで発表された榛澤保彦(はんざわやすひこ)さん、恵美子(えみこ)さん。

第3に、養豚経営で鹿児島県肝属郡肝付町の「高い生産性・収益性の実践と多様なニーズに応えられるかごしま黒豚の生産を目指して」というテーマで発表された有限会社 黒木(くろき)養豚(ようとん)。

第4に、採卵鶏経営で兵庫県豊岡市但東町(たんとうちょう)の「本当に美味しい農産物を消費者に届けたい！」地域農産物の6次産業化で過疎化地域の活性化を図る山の中の行列店“たまごかけご飯専門店「但熊(たんくま)」」というテーマで発表された株式会社 西垣(にしがき)養鶏場(ようけいじょう)である。

また、このほか8事例は優秀賞と決定した。

最優秀賞・農林水産大臣賞

岐阜県羽島市桑原(くわばら)町(まち) 大井(おおい)幸男(ゆきお)さん(酪農経営)

大井さんの経営は、大井さんが平成元年にUターンした時点の売上高 3,000 万円を倍増するという目標を実現し、平成 21 年度には、経産牛 63 頭で、約 6,700 万円の売上高である。同年度の家族労働投下量約 3,000 時間で、1,344 万円の経常所得を確保している。1 時間当たり経常所得は、4,000 円を超えている。

以下、大井さんの経営の評価できる点を 8 点あげる。

第 1 に、畜産協会からのアドバイスで、近親交配を回避するために、全頭家畜登録している。これが可能だったのは、登録に必要なデータを自らのパソコンで管理出来ていたからである。現在、日本ホルスタイン登録協会の HP の情報を用いて、種を選択して購入し、自ら人工授精を行っている。

第 2 に、平成 14 年に牛群検定に加入し、中央畜産会の大家畜 DB を活用している。特に、繁殖成績を、JMR の指標を用いて管理し、淘汰の判断材料としている。

第 3 に、平成 15 年の規模拡大の際には、コストを抑えたフリーバーン牛舎、コンプリートフィーダーへの投資を行い、金融機関からの融資は 1,000 万円に留め、5 年間で当該借入金の償還を終えている。

第 4 に、平成 18 年には、約 250 万円の投資で、発情発見のシステムであるカウメールを導入し、平成 21 年度には、平均種付け回数 1.7 回、平均分娩間隔 12.0 ヶ月を実現している。

第 5 に、以上の一連の投資は、搾乳牛の飼養管理技術をマニュアル化するものであり、素人でも作業ができることを目指している。実際に、常雇いの 60 歳代の男性と、男性が休みの時には、ヘルパーが搾乳牛の飼養管理に当たっている。なお、大井さんの両親は、廃業した近隣酪農家の牛舎を借用し、未經産牛の飼養管理、育成牛の哺育育成を担当している。

第 6 に、大井さん自身は、経営努力で生まれたゆとりで、前述のデータ管理を行い、牛群をそろえるのに余念がない。また、飼料作、情報収集活動、社会活動に積極的に取り組んでいる。

第 7 に、飼料作では、地域資源である河川敷 27ha を有効活用し、粗飼料自給率は 64.7% にもなっている。27ha のうち 14ha は、占有許可を得た後、自力で草地造成を行っている。

第 8 に、羽島市稲ワラ生産組合を近隣の 1 戸の酪農経営と立ち上げ、70ha の稲わらを収集するとともに、岐阜県内の肉牛肥育経営に稲わらを供給している。さらには、稲 WCS にも取り組み、平成 21 年度の 3ha から 22 年度には 5ha に拡大している。以上のように、耕畜連携を通じて、地域リーダーとしての役割を担っている。

最優秀賞・農林水産大臣賞

北海道釧路市 榛澤保彦(ほんざわやすひこ)、恵美子(えみこ)さん(肉用牛(一貫)経営)

榛澤さんの経営は、低位泥炭地土壌、過酷な気象条件でリードカナリীগラス以外の牧草が定着しないという条件不利地域で展開している。平成 21 年度には、繁殖めす牛 71 頭、家

族労働投下量約 6,900 時間で、1,183 万円の経常所得を確保している。

以下、榛澤さんの経営の評価できる点を 8 点あげる。

第 1 に、昭和 58 年に、北見市の電気店経営から妻の実家であった現在地で農業を開始するが、平成元年に当地の牧草でも育つアンガスの繁殖経営に取り組むことになる。

第 2 に、BSE を契機に、子牛が売れなくなると肥育を本格的に開始する。同時に e-ビーふ認証第 1 号を取得する。

第 3 に、平成 17 年に、生協パルシステムとの契約販売を開始し、1 年を通じて一定の取引価格の設定で、経営の安定化に成功している。平成 21 年度は、枝肉価格で 1,100 円/kg を設定している。

第 4 に、食肉処理・小売りの資格を取得し、処理加工施設を建設し、市内のホテルのレストランへ牛肉を供給している。将来は、外食部門も計画している。

第 5 に、農地 140ha は野草地であり、採草地 60ha、兼用地 5ha、放牧地 75ha である。繁殖牛牧区には、8 月中旬から放牧終了の 11 月初めまで種おす牛 1 頭を放し、季節繁殖し、ほぼ年 1 産を実現している。

第 6 に、ジャガイモ残さ等の食品製造副産物を、トランスバッグで購入し、濃厚飼料の給与は一切ない、それ故、出荷肥育牛 1 頭あたりの購入飼料費は 15 万円弱になっている。

第 7 に、基本はアンガスの一貫経営であるが、北海道のアンガス農家の希望に応じて、子牛を肥育もと牛、または繁殖もと牛としても販売している。アンガス生産の拠点の役割を果たしている。

第 8 に、近隣の酪農家に依頼して、アンガスの種おす牛を貸与し、生まれた交雑種を肥育もと牛として導入している。また、近隣の酪農家において、ブラウンスイスの飼養が増加しているが、販売に困っている雄子牛を導入し、アンガスと同様に肥育を開始している。

最優秀賞・農林水産大臣賞

鹿児島県肝属郡肝付町 有限会社 黒木養豚（養豚経営）

黒木養豚の経営は、国見山麓からのミネラル分豊富な湧水を有効活用している。父親である代表取締役社長の経営哲学の下、徐々に規模拡大を行っている。平成 21 年度には、パークシャー種の繁殖めす豚 125 頭、家族労働投下量約 6,600 時間で、3,877 万円の経常所得を確保している。1 時間当たり経常所得は、5,800 円を超えている。

以下、黒木養豚の評価できる点を 8 点あげる。

第 1 に、分娩看護は、全頭に対してつきっきりで行っている。未熟産子への哺乳・里子・仮死状態の子豚への人工呼吸などを実施している。

第 2 に、冬作イタリアンライグラス、夏作ローズグラスを作付けし、青刈りを常に繁殖めす豚に給与し、ミネラル分の補給を行っている。また、繁殖めす豚に午前 7 時から午後 8 時まで電照を施している。さらには、17 度以上で滴冷を施すなど、繁殖めす豚のストレスをなくし、流産の発生を回避している。

第3に、繁殖めす豚の移動の際には、徹底的な洗浄とブラッシング消毒を行ったり、鹿児島県経済連の衛生クリニックを毎年1回実施したりしている。

第4に、以上のことが、パークシャー種でありながら、1腹当たり離乳頭数8.5頭、分娩回転1.16回、育成率94.5%の高い技術水準になっている。

第5に、肥育部門では、去勢は同じ飼料でも脂肪がのりやすいので、雌雄別飼いをやっている。肉豚舎でも滴冷を施している。

第6に、肥育豚だけではなく、子豚においても、広めのスペースを確保している。

第7に、以上5と6によって、繁殖めす豚1頭あたり肉豚販売頭数16.9頭、対出荷頭数事故率5.1%、農場要求率3.99の高い水準になっている。

第8に、長男である専務取締役は、異業種交流に積極的に取り組み、神奈川県と大阪府の業者への産直取引を実現させている。また、大阪のニーズに合わせて、肉豚の出荷体重を135kgと、肥育期間を延長している。年間約1,000頭の肉豚出荷のうち、産直取引は6割にもなっている。このようなマーケティング努力によって、枝肉1kgの総原価が645円であるのに対して、肉豚販売収入が751円と、106円のマージンを生み出している。

最優秀賞・農林水産大臣賞

兵庫県豊岡市但東町(たんとうちょう) 株式会社 西垣(にしがき)養鶏場(ようけいじょう)
(採卵鶏経営)

西垣養鶏場は、飼養羽数9,750羽で、直販率がほぼ100%である。自販機、直売所での販売から、外食部門、加工部門まで展開している。家族労働人数8.5人、家族労働投下量約10,000時間で、1,860万円の経常所得を獲得している。

以下、西垣養鶏場の評価できる点を8点あげる。

第1に、1ケージに採卵鶏を1羽飼養するという、採卵鶏にとっては快適な環境が提供され、病気の発生が抑制されている。

第2に、15種類の厳選した飼料を自家配合して、鶏に給与している。飼料の質を維持するとともに、直売所「百姓館」に飼料を陳列している。

第3に、平成8年に、卵の自動販売機1台の導入から始まり、試行錯誤の結果、3台に増やし、順調に販売できるようになる。平成13年に、直売所「百姓館」を創設する。その際、先行投資で、販売情報管理のためのPOSシステムも導入している。平成15年に黒字へ転換させている。

第4に、平成18年には、外食部門の「但熊」をオープンさせ、直売所と外食部門のシナジー効果を楽しんでいる。ここでも、POSシステムによって売上が管理されている。

第5に、平成21年には、ケーキの専門店「但熊式番館」を建設し、卵を加工に用いることになる。これにより、6次産業化を達成している。売上は、前述のPOSシステムで管理されている。

第6に、鶏糞は、自己で経営している水稻生産4.6haとにんにく約10a強に用いられてい

る。そこで生産された米は、「但熊」の食材として用いられている。五つの炊飯器で、1日10回炊くなど、炊きたてご飯が提供されている。

第7に、鶏卵や食材の品質を高く維持する努力が、リピーターの確保につながっている。また、需要に対して、少なめの供給を目指している。

第8に、以上のように、プロダクトアウトとマーケットインを両立させた結果、鶏卵1kg当たりの販売価格が、464.5円にもなっているのである。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

北海道紋別郡遠軽町(えんがるちょう) 有限会社 リゲルファーム (酪農経営)

オリオン座の一等星の名前を冠した当該経営は、平成16年に1戸の酪農家によって設立された。当地は、北海道においては、比較的自給飼料面積が狭小ではあるが、エストニア原産の豆科牧草や緑肥用ヒマワリの飼料化を行い、単位面積当たりのTDN供給量を高めている。前者の栽培に当たっては、播種時に覆土を厚くするなど、発芽の困難さを克服している。飼料生産面積181haのうち借地面積180haが借地であるが、地主から依頼されて借入するケースが多く、農業委員会を通じた借地契約を行っているので、安定した経営面積を維持している。また、畜舎にカラムツの間伐材を活用し、温度・湿度が調整され、乳牛へ快適な空間を提供したり、監視カメラを畜舎に設置したりして、牛群管理に役立てている。秋まき小麦や和牛のET部門を取り入れるなど、複合経営のメリットを追求している。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

長野県伊那市 網野(あみの)一雄(いちお)、喜(き)久美(くみ)様 (酪農経営)

経産牛飼養頭数規模が35頭ではあるが、牛群検定を実施し、経産牛1頭当たり産乳量9,315kg、平均分娩間隔12.5カ月と高い成績を享受している。自給飼料生産は、トウモロコシ6ha、イタリアンライグラスとオーチャード10haを栽培しているが、トウモロコシサイレージは、仲間6人で設立した機械利用組合のハーベスタ等を使用して、共同で収穫・調製を行い、効率よく飼料作を行っている。その結果、乳飼比は、34.3%と優れた値を実現している。自給飼料の拡大に伴い、既存の地下角型サイロにプラスしてL型ブロックを対面設置するなど、低コストで施設投資を行っている。経産牛1頭当たりの高い所得率の追求と、ゆとりある経営の実現は、少頭数規模の酪農経営のモデルになる。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

岡山県津山市 永禮(ながれ)淳一(じゅんいち)、明美(あけみ)様 (酪農経営)

平成12年から、県下に先駆けて稲発酵粗飼料の給与試験を行うなど、自給飼料生産に取り組み、平成21年には、契約面積5.34haに近中四農研が開発した専用品種「たちすずか」(中国試198号)を栽培している。津山地域飼料稲生産利用研究会では、初代副会長を務めるなど、リーダー的な役割を果たしている。また、土着菌を活用した堆肥の発酵処理、4槽

の連続曝気槽を設置するなど、近隣住民へ臭気が及ぶことを極力抑えている。その努力が、良質な堆肥生産にもつながり、耕種農家のニーズにも適い、170万円もの堆肥の売上高を実現している。隣接する小学校の社会科見学や写生大会を積極的に受け入れるなど、都市化地域における酪農経営の持続的展開に大きな模範となる。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

福島県伊達郡(だてぐん)川俣町(かわまたまち) 渡辺(わたなべ)健(けん)介(すけ)、恵子(けいこ)様 (肉用牛(繁殖))

桑園跡地での有効利用で、平成16年に3頭の肉用牛繁殖めす牛を導入するが、平成21年には33頭まで急速に増頭している。この背景には、経営内部のマネジメントにおいて、①放牧による労働節約的な飼養ができたこと、②養蚕施設の再利用により、施設投資を節約できたこと、③野菜部門の安定的な所得基盤があったことが挙げられる。他方、経営外部のマネジメントにおいて、①地権者11名の遊休地10haが利用できるようになったこと、②稲発酵粗飼料が自給粗飼料生産に代替できたこと、③外部導入牛に対する国・県の助成があったことが挙げられる。そして、従来からのミニトマト70aと併せて、労働競合のない複合経営を構築している。川俣町の耕作放棄率が15.1%に達することに鑑みると、当該経営に期待される役割は、極めて大きいことが理解できる。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

新潟県長岡市 関(せき) 克史(かつし)様 (肉用牛(一貫))

平成16年の東日本大震災よりV字回復を果たした当該経営は、現在繁殖めす牛の成績において、1年1産、肥育牛の成績において、上物率75%以上と高い水準を享受している。平成18年に肉用牛仲間3戸で、「山古志肉用牛生産組合」を設立し、約1億円の共同牛舎・堆肥舎を建設しているが、共同牛舎は、アパート形式で3戸が独立して飼養管理を行っている。3戸の共同農家が、同じ農場で作業をすることにより、情報交流が図れ、お互いの技術向上につながっている。なお、投資金額の自己負担分は、父の代からの蓄積を活用し、ほぼ自己資金で賄っている。また、地域の肥育名人と認定を受けた和牛肥育名人から、2年間にわたり匠の技を伝承できたことは、今後の財産になる。酪農と契約したET産子の引き取り、稲発酵粗飼料への取り組みなど、新たな経営展開が大いに期待される。若い経営者の不屈の努力は、我々に大きな勇気を与えてくれる。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

三重県志摩郡(しまぐん)阿児町(あごちょう) 有限会社 河井ファーム肉よし(養豚)

経営主は、大手スーパーの勤務からUターンした後、父より技術の伝承を受けている。その後、専門の技術コンサルティングを受け、さらには、HACCP様式のマニュアルの構築とその利用を行い、衛生管理に徹底的に取り組んでいる。また、混住化が進む場所に位置し、周囲への配慮から、薫炭液の散布や、「光合成菌」を培養して100倍希釈液を散布するなど、

悪臭防止に努めている。養豚農家グループで、任意組織「やまびこ会」をつくり、共同で全粒粉碎トウモロコシを購入し、飼料コストを低減させている。この任意組織は、農家間の情報交流にも大きく貢献している。肉豚の一部は、麦等を加味した特別の飼料で仕上げ、自社ブランドの「パールポーク」として販売している。また、店舗部門を有し、小売部門にも力を入れている。大手スーパーでの経歴が小売部門の成果にプラスになることが期待される。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

大阪府泉佐野市 有限会社 関(かん)紀(き)産(さん)業(ぎょう) (養豚)

食品工場 7 社から、日量 3 t の規格外品・加工残さ類を、また、学校給食センターから日量 1 t の残飯類を集め、リキッド・乾燥・発酵処理を組合せて、繁殖めす豚用 1 種類、子豚用 4 種類のエコフィードを調製・給与している。また、飼料分析を励行するなど、エコフィードによる飼料体系を確立している。その結果、飼料費は、肉豚出荷 1 頭当たり 7,351 円と生産費調査の 13,685 円と比較しても、いかに低減させているかが理解できる。他方、慣行的な養豚経営よりも 1 から 2 ヶ月間長く肉豚を飼養し、肥育後期には、麦類の多いエコフィードを多給するなど、脂肪交雑が多く、肉質の良い肉豚に仕上げている。南港でと畜解体を行った後、3 分の 1 を 3 戸の食肉問屋に相対で販売し、3 分の 1 を枝肉で買い戻して、小売店に精肉で販売している。当該経営では、「川上さんちの犬鳴(いぬなき)豚(ぶた)」という名称で、商標登録を行っており、小売店では、キャラクターの入った登録商標シールが貼付されて、販売されている。平成 21 年度の枝肉 1kg 当たりの平均価格が 410 円であるが、大阪市場における同年度の上物の平均価格 415 円と比較しても遜色ないレベルであることが理解できる。プロダクトアウトとマーケットインを両立させたビジネスモデルといえる。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

群馬県高崎市下里(しもさと)見(み)町(まち) 有限会社 三喜(さんき)鶏(けい)園(えん) (採卵鶏)

昭和 44 年の 2 万羽から、現在の 31 万羽へ徐々に規模拡大を行っている。木造のセミウィンドレス鶏舎で生産される鶏卵の生産性は、成鶏の飼料要求率 2.12、成鶏 100 羽当たりの投下労働時間は 30.7 時間と高い成績を享受している。大規模な経営でありながら、生産された鶏卵の 6%は、平成 15 年に自ら開設した直売所で販売している。また、前述の 6%のうち、1%は、ジェラートやラスクなど 10 種類のスイーツの原料に使用し、自ら加工して、前述の直売所で販売している。また、近隣小学校が行う社会科見学に協力し、直売所で、加工品の製造・販売を 1 週間体験する場を提供している。6 次産業化に積極的に取り組むとともに、地域交流と食育の場としての機能を果たしている。このような経営努力が、付加価値を産み出すことにもなる。